

波乱万丈の一生が赤裸々に

近代的な看護理論としては初めて書かれた『人間関係の看護論』(原題/International Relation in Nursing, 1952)の著者であり、“精神科看護の母”として知られるヒルデガート・E・ペプロウの波乱万丈の一生が、本人と関係者への丹念なインタビューと多くの記録物から再構成されている本である。まさに“女の一生”を米国看護界の歴史とともに興味深く読むことができた。

ポーランドからの移民の子であったペプロウが米国の知識人として認められるまでには相当な努力が必要だった。「女性に学歴はいらない」「長いものには巻かれろ」に類する古い蔑視的な観念。米国も日本と変わらない状況があったことを改めて知らされた。そのなかにあってペプロウは、どんなときも自身の正義と信念を貫いて行動してきた。大学内部の問題(“長”にふさわしい人を探すのに苦労するとか、明らかに適任の人が落選するとか)やアメリカ看護協会(ANN)の組織の腐敗さえ赤裸々に綴られ、ゴシップを目にするような楽しみさえあった。これは現代の日本でも起こらないとはいえない組織の問題である。自分の所属する組織に置き換えて考えてみてもよいのではないか。

看護界だけでなくヘルスケア全般に関わり、国家的、世界的な仕事に従事していたペプロウであったが、じつは心身社会的にさまざまな苦悩を負っていた。それでもペプロウは、「看護が専門職であって患者の回復・治療に貢献できることを、科学的に(実践と理論から)世間に示す必要がある」と信じ行動してきた。しかし、むしろ彼女の取り組みを阻んだ人

の多くは看護職であった。ペプロウはその能力と努力で成果をあげたが、それだけに周囲の人の能力不足には我慢できず、周囲の人々の自尊心や猜疑心に配慮するのが下手だったようである。周囲の人々と社交的、戦略的に付き合うこともできなかった。そのため、「出る杭は打たれろ」とばかりに足を引っ張られ続けたのである。

管理者として 気づかないといけないうこと

ペプロウの生き方を知ることで、管理者としての自分の行動をリフレクションする手がかりが得られると感じた。

自分以上に優秀なアイディアをもち、現状維持に満足せず高みを目指して行動しようとする部下がいたら、経営者や他職種のスタッフに魅力的に映る部下がいたら、どのように扱うだろうか。一緒に高みを目指せるだろうか。自分の常識のなかに留まらせようとしないうだろうか。果たして自分は看護の専門性に対して信念をもって現場を動かしているだろうか。

ペプロウは、精神科看護師として卓越した実践ができたが、自分自身のストレスやうつ状態、身体的な問題には上手に対処できていなかった。あなたはストレスをどのように対処しているだろうか。身体が出している“危険”のサインを無視していないだろうか。同じ土俵で議論し、創造的な活動のエネルギーを得る相手がいるだろうか(もしそのような相手がいいるとしたら、かなり恵まれていると思わないといけないうかもしれないが)。

600ページを超える中身の濃い本であり、いろいろな側面で現在の看護・医療についての“警告”がある。ぜひそれに気づいてほしい。



ペプロウの生涯

ひとりの女性として、精神科ナースとして

バーバラ・J・キャラウェイ 著

星野敦子 訳

定価 5460 円

(本体 5200 円 + 税 5 %)

医学書院

TEL. 03-3817-5657

ペプロウの生き方から何を学ぶか

湯浅美千代 順天堂大学医療看護学部准教授

評
BOOK